



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

13

ディケンズ

大いなる遺産

日高八郎訳

中央公論社

世界の文学 13

©1957

ディケンズ

訳者 日高八郎

昭和42年1月1日初版印刷

昭和42年1月10日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

大いなる遺産

解説

年譜

3

534

551

大いなる遺産

ロンドン市街図 (19世紀初頭)



第一部

第一章

父の姓がピリップ、私の名がフィリップだったので、幼くて舌のまわらない私は、どちらもピップとしか発音できず、それ以上に長くも、またはっきりも言うことができなかった。だから、私は自分をピップと呼び、人からもそう呼ばれるようになった。

父の姓がピリップだという根拠は、父の墓石の墓碑銘と、鍛冶屋のジョー・ガージャリーにとついだ私の姉から聞いた話とからである。私は父や母の顔を知らなかったし、両親の肖像を見たこともなかった（二人とも写真が発明されるはるか以前の人だったから）、幼い私がかまぶたに描く両親の姿といったら、おかしい話だが、その墓石からの連想によるものだった。父の墓に刻まれた字の格好から想像して、父は肩ひじ張った、たくましい体格の人で、肌は浅黒く、髪はちぢれていたにちがいないという、奇妙な確信を私はもっていたし、母につい

ては、「……および上記の者の妻ジョージアナ」という墓碑銘の字体から想像して、そばかすのある病身の人だったと、子供心にきめこんでいたのだった。両親の墓のかたわらには、長さ一フィート半ほどのかわいらしい菱形の石が五つ、きちんと一列に並んでいたが、それは生存競争の激しいこの世のなかを、あまりにも早く見限った私の幼い五人兄弟の霊を祭ったお墓だった。そして私は、この墓石の形から、彼らはみなズボンのポケットに手をつ込んだまま仰向けになって生まれ、だからお墓になってからも、一度もポケットから手を出さなかったんだという、いやに神妙な信念にとりつかれていた。

この地方はテムズ河下流の沼沢地帯だが、河が曲がりくねって流れているので、海まで二十マイル弱はあった。私がある事件にぶつかり、それを通して、私の生涯のうち、最初に最大に強烈な印象を受けたのは、忘れもしない、夕やみ迫るあるうすら寒い日の午後だったと思う。そういう感じのある夕方、私はつぎのようなことをはつきりと知ったのであった。すなわち、このいらくさの生い茂ったさびしい場所は教会の墓地であるということ。この教区の故フィリップ・ピリップおよび上記の者の妻ジョージアナ、さらにこの兩名の五人の子であったアレグザンダー、バーソロミュー、エブラハム、トバイアスおよびロージャーたちは、幼くして死亡し、ここ

に埋葬されているということ。墓地のかなたの、土手や、土まんじゅうの塚や、水門などがある暗い平らな荒地は、一面の湿地帯で、牛があちらこちらで草をはんでいるということ。その平野の向こうに見える低い鉛色の一条の線は、テムズ河の流れであるということ。はるかかなたに、荒涼として野獣の巢窟かと見まがうところは実は海であり、疾風はその海の方角から吹いてきているということ。そして、むしろにこわくなつて、がたがたと震えながら泣きだしたちっぽけな子供は、ほかならぬ、私、ピップであるということ——。

「やかましい！」恐ろしいとなり声がしたかと思うと、教会の玄関わきの墓のあいだから、突然一人の男が現われた。「静かにしろ、小僧！でなけりや、てめえののどをかつ切つてやる！」

片足に大きな足かせをつけ、灰色のぼろ服を着た恐ろしい男。破れ靴をはき、帽子のかわりに古いぼろきれを頭に巻きつけている男。全身水に濡れ泥にまみれ、石ころで足を痛め、堅い石のため傷つき、いらくさに突きさされ、いばらにひっつかかれた男。彼はびっこをひき、身を震わせ、目をぎらつかせながらうなつた。そして私のあごをひつつかんだとき、その齒は、がたがた鳴っていた。

「あつ！のどを切らないでください！」と私は、おび

えながら哀願した。「お願いです！そんなことしないで！」

「名前を言え」男は言った。「ぐずぐずするな！」

「は、はい、ピップです」

「もう一度」男は私をにらみつけて言った。「はっきり言いな！」

「ピ、ピップです」

「どこに住んでるんだ、言え」男は言った。「指でさしてみな！」

私は、教会から一マイルほど離れたところにある私の村のあたりを、指でさしてみせた。その村は、河沿いの平地に近く、はんの木やまるく刈りこんだ木などのある森のあいだに見えていた。

男はちよつと私のほうを見ていたが、今度は私を逆さづりにして、ポケットをからっぽにしたが、一かけらのパン以外、なんにも出てこなかった。教会が元の位置に戻ったとき——というのは、私は突然恐ろしい勢いで逆さづりにされたので、教会は私の目のまえてひっくり返り、私の足のあいだから尖塔が見えたからである——私は高い墓石の上に載せられてぶるぶると震え、男はがつがつとパンに食いついていた。

「小僧」と、男は唇をなめながら言った。「おめえ、なんて太った頬つべたをしてやがるんだ」



J. W. Paulsen del.

たしかに太った頬をしていたかもしれないが、当時の私は年のわりにはちびで、力も強いほうではなかった。「ちくしょう、まるで取って食えそうじゃねえか」と、男はおどかすように頭を振って言った。「まったく食ってやうてえくらいだ！」

そんなことをしないでください、と私は必死に嘆願し、彼が私を載つけた墓石にいつそう強くしがみついた。それは墓石から落っこちないためでもあったが、また泣きだしそうになるのを押えるためでもあった。

「おい、小僧！」と男は言った。「おめえのおふくろはどこにいる？」

「あっちです」と私は答えた。

男はぎくりとして走りだそうとしたが、すぐに踏みとどまり、肩越しにこちらを振り返った。

「あっちです」と、私はおどおどしながら言った。「『およびジョージアナ』あれがぼくのお母さんです」

「そうか」と、男はあと戻りしながら言った。

「すると、おめえのおふくろの横に並んでいるのが、おめえのおやじというわけかな？」

「そうです、お父さんもないんです。この教区で最近亡くなったんです」

「ふうん！」男は考えこみながら、つぶやいた。「で、おめえ、だれと暮らしてるんだ——だれかのお情でおめ

えが生きてこられたとしての話だな。おれがおめえを生かしておくかどうか、そりやまだきめたわけじゃねえぞ」

「姉さんと暮らしてます。姉さんは、か、鍛冶屋の、ジョー・ガージャリーの、つ、妻なんです」

「鍛冶屋だって？」と言って、男は自分の足に目を落とした。

男はけわしい目つきで自分の足と私を幾度もながめてから、私がすわらされている墓石に近づき、私の両腕をつかみ、落ちそうになるほど私を後ろにのけぞらせた。だから、彼の目は恐ろしい力強さで私の目を見おろし、私の目はひどく惨めに男の目を見あげるしまつになった。「いいか、おい」男は言った。「てめえの命が助かるかどうかのせとぎわだ。やすりって、なんか知ってるな？」

「はい、知ってます」

「じゃあ、兵糧^{イライヤム}ってなんか知ってるな？」

「はい、知ってます」

尋問のたびごとに、おまえなんかひねり殺すのはわけないぞといわんばかりに、男は私を少しづつ後ろにのけぞらせた。

「やすりを持ってくるんだぞ」男はまた私をこづいた。「いいか、両方持ってくるんだぞ」さらにまた一突き。

「さもねえと、てめえの心臓や肝臓をひっこ抜いてやるぞ」ここで、また一突き。

私はすっかりおびえ、ひどくめまいがしてきたので、両腕で男にしがみついて言った。「ぼくをちゃんと起こしてよ。そうしてくれたら、気分もなおって、おじさんの言うこともちゃんと聞けると思うんだけど」

男は私を上下左右に激しく振りまわしたので、教会が風見の鶏の上に飛びあがって見えた。それから、男は私の両腕をつかんで墓石の上にまっすぐにすわらせ、ぞっとするような言葉でこう言った。

「あすの朝早く、やすりと食い物を持ってくるんだ。この二つをまちがいなく、向こうの昔の砲台^{*}のところへ持ってくるんだ。いいか、わかったか。おれのような人間を見かけたのだ、そうでなくっても、だれか人に出会ったなんて、ちょっぴりでも口に出したり顔にも出したりしちゃいけねえ。言うことをきくんなら、命は助けてやる。言うことをきかなかつたり、一分一厘、ほんのちょっとでも命令にそむいてみろ、おめえの心臓と肝臓をひっこ抜いて、焼いて食ってやる。おめえ、おれが一人つきりだと思ってるかもしれないが、おれは一人じゃねえ。もう一人、若けえのが隠れてるんだ。そいつに比べりゃ、おれなんぞ天使みてえにやさしい人間さ。その若けえやつは、おれの言ってることをちゃんと聞いてるんだ。そ

してそいつは子供を襲って、心臓と肝臓をひっこ抜いてしまふ特別のやりくちを知ってるんだ。いくら子供がそいつから隠れようたつて、そりゃむだだ。たとえ子供が戸に錠をかけ、ベッドにぬくぬくともぐりこみ、頭からふとんをかけ、これで大丈夫と思つたつて、その若けえやつはそいつと忍びこんで、小僧をひき裂いてしまうんだ。そいつが今おめえに飛びかかろうとするのを、おれはやつとの思いでくいとめてやつてるんだ。そいつがおめえの内臓に手をかけねえようにするなあ、まったく容易なことじゃねえ。で、おめえはどうする気だ？」

私は、やすりと、それからできるだけたくさんの食い物をかき集めて、あすの朝早く、砲台のところに持っていくますと答えた。

「もしそうしなかつたら、神さま、私を打ち殺してください、と言え」と、男は言った。

私がそのとおりに言うと、男はやつと私を地面に降ろしてくれた。

「いいか」と男は続けた。「ひきうけたことを忘れるな。それから、例の若けえやつのもな。さあ、家へ帰んな！」

「お、お休みなさい」私はどもりながら言った。

「さぞかし、たつぷりお休みになれるこつたろうよ！」男はあたりの寒いじめじめした原っぱを見まわしながら

言つた。「蛙^{かえる}にでもなりてえくらいだ。それとも、うなぎにでもよ！」

そう言うと、男はがたがた震えるからだを――からだがばらばらになるのを防ぐかのように――両腕で抱きしめ、教会の低い塀のほうへ、びっこをひきひき、歩いていった。私は、男がいくらくさや草むした塚にまつわるいばらのあいだを、ひよこひよこ歩くのを見ていたが、その歩きかたといったら、幼い私の目には、まるで死者たちが墓の中からそつと手を伸ばして、彼の足首をひねつて墓の中にひきずりこもうとするのを避けるような足どりに見えた。

教会の低い塀のところまで行くと、男は足が麻痺^{まひ}している人のような格好で塀を乗り越え、それから私のほうを振り返つた。その振り返る姿を見て、私は家のほうに向きなおり、一目散に駆けだした。が、じきにまた振り返つてみた。すると男はあい変わらず、両腕でからだをかかえるようにして、大雨や満潮に備えて、踏み石がわりに沼のあちこちに置いてある大きな石づたいに痛む足をひきずるようにして、河のほうへひき返して行くところだった。

私が立ちどまつて男のほうを振りむいたときには、沼地はもはやただの一条の黒い水平線にすぎなかった。河もまた、沼地ほどではないが、あまり幅広くも、また黒

くもない一条の水平線にすぎなかった。そして空も、長い燃えるような赤い線と濃い黒い線との、まじりあったものに見えた。見わたしたところ、きわだつてそびえて見えるのは、河つぶちに黒いものが二つ、ぼーっと見えるだけだった。そのうちの一つは、水夫が舵^{かじ}をとるための水路標識で、それは棒の先にたがのとれた樽^{もろ}をのせたような形だったが、そばで見ると、みにくいしろものだった。もう一つは絞首台で、むかし海賊の首をくくつた鎖がいくつかついていた。男は、この絞首台のほうへびっこをひきひき歩いていった。まるで息を吹き返して絞首台から降り、またもう一度ぶらさがりにいく海賊のように。そう思うと、私はこわくなつて、ぎよつとした。牛も頭を挙げて彼の後ろ姿を凝視するふうだったので、幼い私は、牛も自分と同じことを考えているのかしら、と思つたりした。私は、例の恐ろしい若者らしい者がどこかにいないかと、あたりを見まわしたが、その気配はなかった。しかし、私はふたたび恐怖におそわれて、一気に家に走つて帰つた。

第二章

ジョー・ガージャリーの妻である私の姉は、私より二

十歳以上も年うえだったが、私を「手塩にかけて」育てあげたということが、自分でも自慢であつたし、近所でも大評判になつていた。「手塩にかけて」という言葉がどういふ意味なのか、当時だれも教へてはくれなかつたし、姉は、固くていかつい手で私や夫にさかんに暴力を加へていたから、幼い私は、ジョーと自分とは姉の手の面倒にかかりながら育てられたんだろう、くらいに思つていた。

私の姉は美人ではなかつた。だから私は、姉はジョーを、顔によつてではなく、手塩にかけて結婚したにちがいないと、ばくぜんと考えていた。ジョーはなかなかの男前で、亜麻色の巻き毛がつるつるした両頬に垂れさがり、目は非常に淡い青味を帯びていたが、なんとなく白目と入りまじつてしまつているように思われた。温和で人が良く、心がやさしく、のんきで、少し抜けたところもある、愛すべき人間だつた。力の強い点でも、気の弱い点でも、ギリシア神話のヘラクレースによく似ていた。

ジョーの妻である私の姉はというと、髪の毛と目が黒く、肌は一面に赤味がかつていたので、私はときどき、姉はからだを洗うのに、石けんのかわりに、にくずくおろしでも使つているんじゃないだろうか、と思つたりしたものである。背は高く骨ばつていて、ほとんどいつもごわごわした布のエプロンをつけていた。このエプロン

は肩越しにひもがついており、背中では二カ所結ばれ、前のほうには恐ろしく固い胸当てがついていて、ピンや針が一面にさしてあつた。姉は、このエプロンをいつもつけていることで、自分の甲斐甲斐しさを見せびらかし、甲斐性のない夫を非難するふりだつた。けれども私には、姉がなぜこのエプロンをつけていなければならないのか、まったくわからなかつたし、明けても暮れてもつけていなければならない理由は、どうしても思いあたらなかつた。

ジョーの鍛冶場は私たちの家にくつついていた。私たちの家は、当時のイギリスのほとんどの家がそうだつたように、木造だつた。私が墓地从ら走つて帰つてきたとき、鍛冶場はもう閉められていて、ジョーは台所に一人ぼつんと腰をおろしていた。ジョーと私とはいわば共通の受難者で、そのため同類として信頼しあつていた仲だつたから、私が戸の掛金をはずして入口の反対側の炉辺のところにかけていた彼をのぞくと、彼は私にそうつと言つた。

「ピップ、姉さんはおまえを探しに、もう十何回も出ていったぞ。今も出てつたが、これで十三回目だ」

「ほんと？」

「そうだよ、ピップ。それに悪いことにや、くすぐり棒を持つていったよ」

この憂鬱な知らせを聞いて、私はチョッキに一つだけ残っているボタンをくるくるまわしながら、すっかりしよげて火を見つめた。くすぐり棒というのは、さがが蠟ろうで固めてある棒で、私がよくくすぐられるため、棒はこすれてつるつるになっていた。

「姉さんはすわったかと思うと立ちあがってよ、くすぐり棒をひつつかんで猛然と出ていったよ。ほんとなんだ」とジョーは火掻き棒で下の格子の火をゆつくり払い落とし、火を見ながら言った。「猛然と出ていったんだよ、ピップ」

「大分前に出ていったの？ ジョー」と私はきいた。私は彼をからだは大きいが自分と同じ子供だと考え、いつも彼を友だち扱いにしていた。

「そうだな」とジョーは安物のドイツ製の木製時計を見ながら言った。「最後に猛然と出ていってから五分くらいだったかな？ おや、帰ってきたぞ。おい、ドアの後ろに隠れろ。つるしタオルの後ろに隠れるんだ」

私は忠告に従った。姉はドアをぱつと開け、ドアの後ろになにか障害物があるのを感じると、すぐに原因を見破り、くすぐり棒を使って私が隠れているのをつきとめた。姉は私をぎゅつとつかんだかと思うと、ジョーのほうに突き飛ばした——私はしばしば夫婦間の飛び道具に使われていたのである。どんな場合でも、喜んで私をう

まくつかんでくれるジョーは、私を暖炉のほうへ移し、彼のがんじょうな片足で、静かに私を守ってくれた。

「どこに行つてたんだい、小猿！」と姉は足を踏み鳴らしながら叫んだ。「どこに行つていたのか、すぐに言いな。ひとが心配していらいらして、命を縮めているのにさ。言わないとおまえが五十人いようが、ガージャリーが五百人いようが、かまうもんか、隅ぐもっここからおまえをひっぱり出してやる！」

「墓地へ行つただけなんです」と私は、自分の腰掛けの上で小さくなり、からだを震わせて泣きながら答えた。

「なに、墓地？」と姉は言った。「もし私がいなかったらね、おまえなんか、とつくに墓場に入っちゃまってるんだよ。いったいだれがおまえを手塩にかけて育てたんだい？」

「姉さんです」と私は答えた。

「なぜ私がそんなことをしたか、知りたいもんだよ！」と姉は叫んだ。

「ほく、わかりません」と、私は泣き声で言った。

「私にだって、わからんよ！」と姉は言った。「私やもう二度とこういうこたあ、しないよ。するもんですか。おまえが生まれてから今まで、ずーっとね、このエプロンをはずしたこたあないんだ。鍛冶屋のおかみにねえ、それもガージャリーのようなとんまのおかみにだよ、な

っただけでもう沢山なのに、そのうえ、おまえの面倒までみてやれますかってんだよ」

みじめな気持で火を見つめているうちに、私の考えは姉の言葉とは関係のない方向にそれていっていた。というのは、沼地にいたあの鉄の足かせをつけた脱走者と、話に聞いた恐ろしい若者と、やすりと、食べ物と、私を雨風から守ってくれるこの家で盗みを働くという恐ろしい約束——こういつたことが、燃える石炭を見つめているうちに、私を責めるように浮かびあがってきたからである。

「へっ！」と姉はくすぐり棒を元の場所に戻しながら言った。「墓場とはね。二人とも、墓場とはよく言つたもんだね」ところが、ジヨ―は墓場だなどと言いはしなかったのだ。「おまえたちは、この私をそのうち墓場に追いやるつもりなんだらう。私がいなくなったら、さぞかし二人でうまくやれるだらうさ」

姉がお茶のしたくを始めると、ジヨ―は自分の脚越しに私をのぞきこんだ。ジヨ―は、頭の中で自分と私とをいっしょに合わせて、姉が予言したような悲しむべき状態になったら、二人は実際どんなことになるものやら、と胸算用しているふうであった。それから腰をおろして、雲行きの悪いときにいつもやるように、右側の亜麻色の巻き毛と頬ひげを手でいじくりながら、青色の目で姉の

姿を追っていた。

姉は、私たちにバターつきのパンを切ってくれるとき、いつもきちんときまつた恐ろしい切りかたをした。まず左手でパンのかたまりを胸当てにしかりと押えつける——ここで、ときにはピンが、ときには針がパンの中にくい込み、これを私たちがあとになって口の中に入れるということになる。このあと、彼女はナイフにバターをいくらかつけ（あまり多くではない）、まるで薬屋が膏薬（かよう）かになかをつくるように、ナイフの両側をまことに器用に使いながらバターを延ばしたあとで、端の皮のところにバターを集め、さっとけずり取る。それから最後にこの膏薬の端でナイフを手ぎわよくさつとふいて、そのパンのかたまりから厚い一切れを丸く切り取る。それをかたまりから切り離すまえに二つに切って、一つをジヨ―に、もう一つを私にくれるのだった。

その夜の場合、私は腹がすいていたけれども、私の分を食べる気にはなれなかった。私が知ったあの恐ろしい人と、彼よりもっと恐ろしい人らしい相棒の若者のために、何か食べ物をとっておいてあげなくちゃ、と思っていたからだ。姉が大変なしまり屋であること、だからたとえ私が食品棚から何かくすねようとしても、余分の食べ物はいくらほども残ってはいないだらうということを、私はよく心得ていた。で私は、自分の厚切れのバターつ

きパンをズボンの中に押し込むことにきめた。

この目的をやりとげようと決心することは、まったく恐ろしいことだった。高い家のてっぺんから飛びおろるとか、底知れぬ水の中に飛びこもうとするのと同じくらい、勇気が必要だった。事情を知らないジョーがそばにいたため、私はいつそうやりにくかった。まえにも述べたように、私とジョーとは、共通の受難者としてのひそかな同志意識と、それから私に対するジョーのやさしい友情とから、私たちは自分たちのパンを黙って持ちあげ、お互いに見せびらかしては食べた量の比べっこをし、それによってまたあらたに食べる速度の競争をするというのが、毎晩の習慣になっていた。その晩も、ジョーは何回も自分のみるみる小さくなっていくパンを見せて、この毎晩の友だち同士の食べ比べをやろうと誘ってくれた。だが彼は、そのつど、私が黄いろい紅茶茶わんを片方のひざにのせ、もう一方のひざにまったく手をつけないパンをのせてじっとしているのを見ていた。ついに私はせつばつまって、計画をどうしても実行に移さなければならぬ、そのためにはこの場の状況に近い、できるだけ自然なやりかたでやったほうがいい、と考えた。私はジョーが私をちらっと見る瞬間を利用して、パンをズボンのなかに押し込んだ。

ジョーは、私がつきり食欲をなくしたと思ったらし

く、心配そうな顔をした。そして彼のパンを考えこみながら一口かんだが、いかにもまずそうだった。彼はパンを口の中でいつもよりずっと長いこともぐもぐかみながら、しきりに思案していたが、にがい丸薬でも飲むように、やっとごくりと飲みこんだ。このあと、ジョーがもう一口かじろうとして、パンを大きくかじれるように首をちよっと横にかしげて私のほうをちらと見たとたん、私のパンが消えうせているのに彼は気づいた。

自分のパンをがぶりとかじろうとして急にやめ、私をまじまじと見つめるジョーの驚きあきれた様子があまりに露骨だったので、私の姉の目をかすめるわけにはいかなかった。

「どうしたんだよ」と、紅茶茶わんを置きながら、彼女は詰問した。

「おい、おい、ピップ」と、ジョーは私をひどく非難するかのように、頭を左右に振り振り口ごもりながら言った。「おい、ピップたら！ 丸飲みするばかりいるかのどかどかにつつかえるぞ。おまえ、かんじやいないだろう？」

「今度は何をしでかしたんだい？」と、姉は一段ときびしく詰問した。

「げーっとやって吐き出せるもんなら吐き出しちまいな」と、ジョーはすっかりあわてて言った。「お行儀を